

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第167号

イザヤ 65:1

平成21年8月28日

私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや、神に、でしょう。あるいはまた、人の歎心を買おうと努めているのでしょうか。もし私が今なお人の歎心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。 **ガラテヤ人1：6-12**

今世紀に入ってキリスト教界に新しい体制、新奇な教えが加速度的に広がってきています。二十世紀末に宗教的指導者たちの間で唱えられるようになった思想、—新しい世界秩序の下では教義を厳格に固執する、いわゆる「原理主義」は世界平和の敵—という考え方が、今日では当たり前のように取り沙汰されるようになっていきます。イスラム教原理主義、ユダヤ教原理主義、キリスト教原理主義、非宗教的原理主義はどれも、新世界構想が描く理想的な世界観にとって深刻な脅威である、排除しなければならぬという主張です。政治、経済、金融、文化、宗教が一つに統合されなければ世界が新しい秩序の下で一丸となって平和を推し進め、歩調を保っていくことはできないという前提の下で進められている昨今の世界的動きです。原理主義と聞くだけでイスラム教徒によるテロリズムを思い浮かべ、危険と即断してしまうのが大方の反応ではないかと思いますが、「キリスト教原理主義」として指摘されているのが一体何なのかを知らされれば、問題が非常に深刻であることに驚く人たちは多いでしょう。今や、キリスト信仰はかつてない危機にさらされているのです。

世界平和の名の下に、全世界の宗教的指導者たちは、すべての宗教は互いに、同じ神に至る合法的な道であることを認め合い、理解し合うことによって歩み寄り、一致しなければならないという新世界構想を推し進めています。したがって、絶対論主義、独断主義は人類の残存と平和を脅かすものであるという彼らの論理によれば、「イエス・キリストが父なる神に至る唯一の道」という聖書の主張、キリスト信仰の真髄は世界平和の敵ということになるのです。驚くべきことに今日、キリスト教指導者、指導的神学者の中にもこの動きを支持する者たちが増えており、キリスト教神学はすでにキリストが宣教された聖書の奥義、御子イエス・キリストによる救いの教えからかけ離れてしまったと言っても言い過ぎではないのです。使徒パウロが西暦一世紀、初代教会の時代にすでに教会に忍び込んでいた「霊知」と呼ばれた異端を、キリストの教えとは異なった「**ほかの福音**」として非難したように、教会組織が形成される前に正典化された「書かれた神の言葉—聖書—」をキリストの教えの唯一の拠り所とするキリスト者は、昨今のエキュメニカル運動（教派ではなく、世界宗教一致運動）が推し進めているのが偽りの福音であることを認識し、断固として立ち向かわなければならないのです。

世界のキリスト教指導者たちは世界平和を求めるあまり、キリスト信仰の真髄「キリストによる罪の贖いが全人類の唯一の救い、神との唯一の和解の道である」という教義を棄てて、他宗教に迎合する道に乗り換え始めています。宗教間に平和がなければ、国家、人種、民族間に真の平和はない、世界平和の鍵は宗教的平和にあると指導的神学者たちは主張し、どの宗教を信じるかは個人の自由、したがって、敵対関係を助長する宗教的原理主義は撲滅されるべき、特定な宗教、教義、信仰、手段によってではなく、全人類が平和のもとに一致することによって、すべての者が救われるとするこの宗教観は、平和を求める世論に受け入れられるのです。確かに「**真理から離れた人々の戒め**」(テス1:14)はこの世に受けるのです。この「新興信仰」は、人々が「**健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために.....真理から耳をそむけ、空想話にそれで行くような時代**」(テモテ第二4:3-4)、すなわち、今日、主流を占め始めています。

人間は互いに他人の考え、信仰を尊重し、分裂ではなく、平和と安全な社会機構、組織を築いていく責任がある、そのために貢献できることがあれば、積極的に取り組むことが要求される、という理屈はもつともで、このことに異議を申し立てる者はだれもいないでしょう。しかし、キリストの宣言「**わたしが道であり、真理であ**

り、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」(ヨハネ 14 : 6) は、キリスト信仰に生きる者にとってはこの世での束の間の平和、残存と引き換えに、譲ることのできない永遠の真理なのです。平和、社会正義、福祉、個人々の権利、地球の環境学的関心を訴え、新たな世界的秩序を樹立しようとするこの世の傾向は、全人類の一致をスローガンにしていますが、古代文明発祥の初期、バベルの塔建立の中断を御使いに命じられて、唯一真の神を排除して人類の統一があり得ないことを神が明らかにされたように、また人間史が実証しているように、人間の妥協や努力で全世界の平和を達成することは不可能なのです。むしろ、この台頭し始めた傾向の隠された真の動機は、救いの唯一の道を高らかに宣言するキリストの福音を根絶することなのです。キリストの言葉、聖書の教えを真剣に受け止め、忠実に実践すべく、この世に罪の悔い改めと神への立ち返りを宣教する「キリストの福音」と、すべての宗教を合法的な救いの道であると認め、人間の手によるこの世的な平和を追求するエキュメニカル運動が提唱する“新興信仰”とは、霊の源が正反対であるため、折り合うことはあり得ず、衝突が起こることは避けられません。「わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです.....あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たかと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります」(ルカ 12 : 49-53) と、信仰によって親しい者の間にも分裂が起こるときが来ることをキリストが警告されたように、正しい者が残されるためには、分裂は避けられないのです。確かに、世界経済、世界法、世界金融、世界宗教、世界文化、世界倫理.....すべてが全世界的統一に向かっているこの時代に、福音の排他的教理が受け入れられないことは、すでにキリストが教えられたことでした。

初代教会の時代、キリスト者が人の歓心か、神の歓心か、そのどちらを優先するかに迫られたとき、パウロが警告したことは、「偽善者たち。あなたがたは自ら空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか」(ルカ 12 : 56) というキリストの問いかけを思い起こさせるものでした。冒頭に引用した文脈でパウロは、自分が宣べ伝えている福音は人間によるものではないと語っていますが、これはパウロが編み出した新説というのでは決してなく、人からの受け売りではないパウロ自身神の啓示によって直接受けた「私の福音」のことでした。長い間、イスラエルの預言者たちによって語られてきたことがキリストの来臨によって初めて顕され、人々が理解できるようになった神の奥義のこと、まさにキリストが宣教された福音そのもののことでした。ここでパウロが福音の抛り所としたのが、当時の宗教指導者たちの言い伝えや伝統ではなく、書かれた神の言葉、当時すでに普及していた『ヘブル語(旧約)聖書』の巻き物であったということは見逃してはならない点です。「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、知恵に富む唯一の神」(ローマ人 16 : 25-27) とパウロが描写したイエス・キリストの啓示によって、パウロは同世代のだれよりも精通していたヘブル語聖書を解釈し、神の奥義、福音を解き明かし、後世に伝えたのでした。

キリストの再臨のときが近づくにつれ、サタンの働きによる偽りの霊の教えは、聖徒をもだますほどに巧妙、狡猾になっています。サタン、悪霊の暗闇の世界に関心を持ち、オカルト、魔術、占い、異端の宗教儀式などを通してサタンの支配下、影響下に置かれてきた者たちだけでなく、すべての人々をも巻き込む全世界的な欺瞞が、近い将来、反キリストなる平和主義者を全世界の指導者として迎え入れる世界体制の糸口を開くことになることを聖書は預言しています。この反キリストによる宗教組織を、キリストの愛弟子ヨハネは「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン」(黙示録 17 : 5) と呼び、その女が、紫と緋の衣を着、金、宝石、真珠で身を飾り、金の杯を手を持ち、富み栄え、権力を欲しいままにし、この世でいかに魅力的であるかを描いています。しかし、この女の真の姿は、憎むべきものや自らの不品行でこれ以上汚れようもないほど汚れた、まさに墮落そのものの状態です。にもかかわらず、この世の者たちはこの女の魅力のとりことなり、不品行に酔いしれたのでした。顕されたビジョンをヨハネがこのように描いたように、聖書は、カルデア人の国バビロンを占星術、魔術、オカルト、超自然的なわざによってこの世の者たちを魅了してきた国、霊的惑わしの象徴、悪の根源として描いています。昨今静かに信奉者を増やしているヨガ、呼吸、整体術等の身体技法、チャンネルング、瞑想、前世、催眠等心理療法、占い、交霊術、心霊療法、アロマ療法、ホリスティック医療法などを包括する「ニューエイジ」と呼ばれる霊性復興運動ははじめ、超自然的、精神的思想とこのバビロンの秘儀とは密接な関係があり、源が同じなのです。今日、神の霊とは無縁の汚れた霊、悪霊の働きがすでに多くの人たちの日常生活に入り込んでいることを物語っています。ヨハネは、終末の末期に反キリストが敷く欺瞞をこのバビロンに関連づけたのでしたが、パウロが「キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています」(コリント人第二 11 : 3) と恐れたサタン、悪霊による惑わしの問題が今日ほど深刻になった時代はかつてなかったものでした。